



発掘された 松本2023

松本市遺跡発掘報告会

3/9 土 13:00～15:50

Mウイング 6階ホール

主催：松本市教育委員会

協力：東海大学・長野県埋蔵文化財センター・山形村教育委員会

速報展のご案内

報告会で登場した
遺物を見に行こう!



令和6年 **3月6日** **水** ▶▶ **4月8日** **月**

開館時間：午前9時 ▶ 午後9時 休館日：3月19日 **火**

会場 松本市立博物館 1階 市民交流スペース 松本市大手3丁目2-21

観覧料 無料



YouTube でのオンライン配信

- 報告会の内容を編集した動画を4月中旬頃に配信いたします。
- レジユメのデータは、松本市 HP よりダウンロードいただけます(3月上旬頃)。

YouTube
松本市公式チャンネル



レジユメダウンロード



Facebook



Instagram



SNS、ホームページで最新情報をチェック!!

発掘された松本 2023

～松本市遺跡発掘報告会～

次第

令和6年3月9日（土）

司会 文化財課長 竹原 学

13：00 開会

挨拶 松本市教育長 伊佐治 裕子

13：05 趣旨説明・令和5年発掘調査の概要
(10分) 文化財課 係長 百瀬 耕司

13：15 報告① 史跡松本城 南外堀 第6次・西外堀 第5次発掘調査
(25分) ～西外堀で初、南外堀で二度目の横断調査～
文化財課 早田 拓未

13：40 報告② 史跡弘法山古墳 第4次発掘調査
(25分) ～3世紀のまつもとの王墓を探る～
文化財課 小山 奈津実

14：05 報告③ 中山北尾根3号古墳 発掘調査
(30分) ～87年前の発掘者との遭遇～
東海大学文明研究所 白川 美冬

14：35 休憩（10分間）

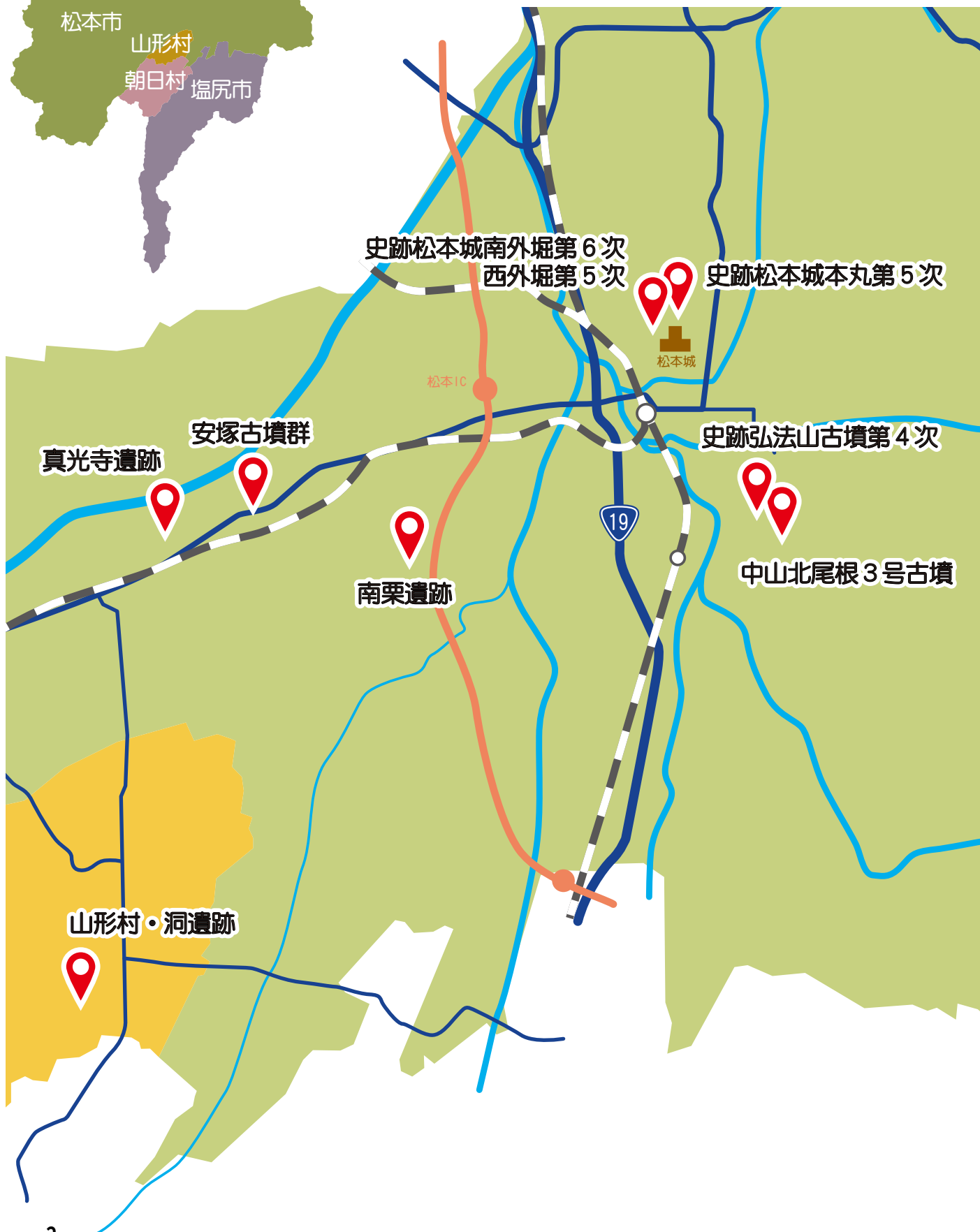
14：45 報告④ 真光寺遺跡 発掘調査
(30分) ～中世墓域と居住域の調査～
長野県埋蔵文化財センター 杉木 有紗

15：15 松本市周辺の発掘紹介
(25分) 洞遺跡 第4次発掘調査
～県内最古級とみられる縄文早期末の玉製品が出土～
山形村教育委員会 和田 和哉

15：40 質問
(10分)

15：50 閉会

令和5年の調査地点



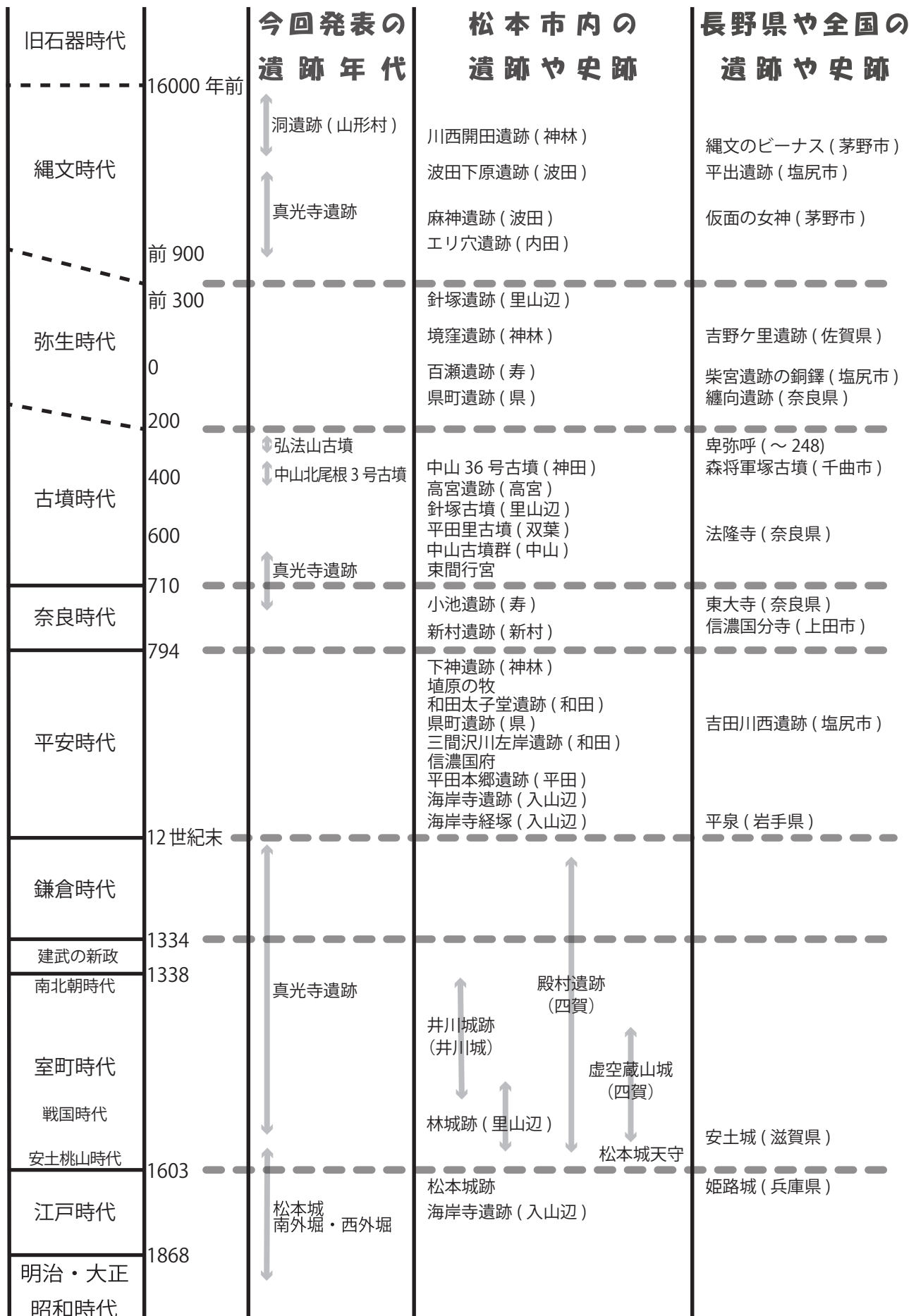
令和5年（2023年） 埋蔵文化財発掘調査・整理報告書刊行一覧表

令和6年2月1日現在

No.	遺跡・調査名	調査期間	調査面積	調査原因	時代	特徴・備考
1	シンコウジ 真光寺遺跡	R5.4～12	2,600㎡	松本波田道路改築事業	中世・近世	溝跡・火葬施設
2	ミナミクリ 南栗遺跡	R5.4～12	5,200㎡	松本波田道路改築事業	古代・中世	集落跡・火葬施設
3	ヤスヅカコフン 安塚古墳群	R5.6～9	1,000㎡	松本波田道路改築事業	古墳時代	古墳
4	史跡松本城本丸第5次	R5.5～6	11㎡	遺構確認調査	近世	城館跡
5	ヨウボウヤマコフン 史跡弘法山古墳第4次	R5.6～調査中	84㎡	史跡弘法山古墳再整備事業	古墳時代	古墳
6	ナカヤマキタオネ 中山北尾根3号古墳	R5.9	53㎡	史跡弘法山古墳再整備事業に伴う周辺古墳群の調査	古墳時代	古墳
7	史跡松本城南外堀第6次・西外堀5次	R5.4～R6.2	672㎡	史跡松本城南・西外堀整備事業	近世	外堀
8	市内遺跡確認調査	通年	—	試掘・確認調査 (試掘詳細は次ページ)	各時代	試掘
9	イデガワミナミ 出川南遺跡第16・29次 (整理作業、報告書刊行)	通年	—	県道改良事業	古墳時代～近現代	溝跡
10	アガタマチ 県町遺跡第16・17次 (整理作業)	通年	—	保育園建設事業ほか	弥生時代・古代	集落跡
11	サンノマルアト ドイジリ 松本城三の丸跡土居尻1次・ ダイミョウチヨウ 大名町第3次 (整理作業、報告書刊行)	通年	—	市博物館整備事業	中世・近世	武家屋敷
12	サンノマルアト ドイジリ 松本城三の丸跡土居尻第9次 (整理作業)	通年	—	松本城南・西外堀整備事業	中世・近世	武家屋敷
13	サンノマルアト ドイジリ 松本城三の丸跡土居尻第11次 (整理作業)	通年	—	松本城南・西外堀整備事業	中世・近世	武家屋敷

開発工事等による市内遺跡試掘確認調査一覧（令和5年）

No.	事業者	所在地	原因事業	調査面積 (㎡)	遺跡との関係		遺構等の有無	検出遺構・遺物	備考	期間
1	長野県	波田	農業基盤整備	4.00	上野	該当	なし			1月26日
2	民間	岡田下岡田	宅地造成	20.00	岡田堀ノ内、岡田田中	該当	あり	住居跡、土坑、土師器	記録保存	1月30日、31日
3	民間	村井町南4丁目	宅地造成	23.00	村井	該当	なし			2月15日、16日
4	民間	清水2丁目	個人住宅	4.00	四ッ谷	該当	なし			2月24日
5	国土交通省	島立	自動車専用道路	114.00	南栗	該当	あり	溝	確認調査	3月13日～17日
6	松本市	城西2丁目	市道改良	10.00	松本城跡（三の丸土居尻）	該当	なし			3月16日
7	民間	県1丁目	宅地造成	4.69	県町	該当	なし			3月20日
8	民間	中央2丁目	事業所建設	20.00	松本城下町跡（小池町）	該当	あり	近世陶磁器		3月27日、28日
9	民間	内田	個人住宅	10.24	砂原	該当	なし			4月10日
10	民間	里山辺	集合住宅	24.00	兎川寺	近接	なし			5月15日
11	民間	神田1丁目	集合住宅	21.00	神田	該当	なし			5月16日
12	民間	里山辺	宅地造成	18.40	惣社、新井	近接	なし			6月7日
13	民間	本庄2丁目	店舗	29.00	松本城下町跡（博労町）	該当	なし			6月14日
14	民間	島立	宅地造成	26.90	新村・島立条里的遺構、南栗	該当	なし			6月21日
15	松本市	城西2丁目	宅地造成	14.00	松本城跡（三の丸土居尻）	該当	あり	整地層	記録保存	6月26日、27日
16	民間	桐1丁目	宅地造成	33.60	元原	該当	なし			7月3日
17	民間	出川町	店舗	18.50	出川西、出川南	該当	あり	弥生土器・壺	記録保存	7月24日
18	国土交通省	和田	道路開設	273.50	安塚古墳群	近接	あり	古墳	確認調査、包蔵地拡張	8月21日～9月1日
19	民間	横田2丁目	宅地造成	20.00	横田	該当	なし			8月22日
20	民間	筑摩3丁目	宅地造成	17.50	三才	該当	なし			8月23日
21	民間	双葉	公民館	7.84	出川西	該当	なし			8月24日
22	松本市	和田	市道改良	3.50	二階道	該当	なし			9月6日
23	民間	双葉	土地利用検討	120.00	出川南	該当	あり	包含層		9月12日～20日
24	民間	沢村2丁目	宅地造成	29.62	旧射的場西、元原	近接	なし			9月19日
25	松本市	中山	墓地造成	10.10	西越、中山古墳群	該当	なし			9月28日
26	長野県	波田	学校改修	10.58	波田下島	該当	なし			10月2日
27	民間	岡田町	集合住宅	24.50	岡田西裏	該当	なし			10月3日
28	民間	芳野	工場	25.45	平田北	該当	あり	ピット、須恵器	確認調査	10月10日、11日
29	民間	深志2丁目	駐車場	15.30	松本城下町跡（飯田町）	該当	なし			10月25日
30	国土交通省	波田	道路開設	76.00	真光寺、真光寺古墳群	該当	あり	溝、土坑、内耳鍋	本調査予定	11月29日～12月6日



史跡松本城南外堀跡^{第6次}・西外堀跡^{第5次}発掘調査

一西外堀で初、南外堀で二度目の横断調査一

早田 拓未



1 調査の概要

- (1) 遺跡の所在：松本市大手3丁目 ほか
- (2) 調査目的：松本城南・西外堀復元事業に伴う南・西外堀跡の確認調査
- (3) 調査期間：令和5年（2023）4月10日～令和6年2月29日
- (4) 調査面積：672 m²
- (5) 主な遺構：木杭列、石垣、白色粘土（水門関係遺構）、堀底
- (6) 主な遺物：家紋瓦（五七桐、丸に立沢瀉^{たちおもだか}、離れ六つ星）、鯰瓦^{しゃち} など



2 遺跡の概要

松本城は本丸・二の丸・三の丸と、それぞれを囲む内堀・外堀・総堀の三重の堀を設けた城郭部分及び城下町で構成されています。外堀について明確な成立時期は不明ですが、おそらく築城期に合わせて整備されたものと考えられます。明治維新以降、松本城の政庁・軍事的拠点としての役目を終える中で、外堀の一部（南側・西側）が大正8年（1919）から昭和初年にかけて埋め立てられ、宅地化しました（写真1）。



写真1 松本城 上空南から撮影（撮影日：令和5年12月18日）

3 遺跡の調査歴

現在、松本市は埋め立てられた南・西外堀の復元整備に取り組んでいます。復元に必要な考古学的情報を収集するため、試掘調査を実施しています。これまでの調査から松本城の西外堀では、二の丸側と三の丸側のともに土塁で木杭列（写真2）が設けられていること、南外堀では二の丸側は土塁で木杭列（写真3）が設けられ、三の丸側では石垣（写真4・5）が用いられていることを確認しています。昨年度は初めて二の丸から三の丸までを横断する調査をおこない、南外堀において断面形状を把握しました（写真6）。



写真2 西外堀 木杭列（昭和61年度）



写真3 南外堀 木杭列（令和3年度）



写真4 南外堀 石垣（平成9年度）



写真5 南外堀 石垣（令和4年度）



写真6 南外堀 横断調査の様子（令和4年度）

4 調査の成果

今年度の調査は、これまでの調査結果を踏まえ、南・西外堀の立ち上がり位置の確認、石垣や木杭列の有無と、堀の形状・範囲・深さの確認、関連遺構の確認を目的としました。合計5本の調査区を設定し発掘調査をおこないました（表1、図1）。

表1 令和5年度 南外堀・西外堀調査箇所

位置	調査区名	南・西外堀	調査区の規模 (m)		目的
			東西	南北	
■	M 拡張	南外堀	1 2	1 6	木杭列の確認と堀底形状の再確認
■	N	南外堀	2	9	木杭列の確認と二の丸南西部張り出しの確認
■	O	南外堀	9	3	石垣の確認と石垣と土塁の接続の確認
■	P	南外堀	9	3 0	南外堀の形状・範囲・深さの確認
■	8	西外堀	2 0	9	西外堀の形状・範囲・深さの確認



図1 南外堀・西外堀調査位置図

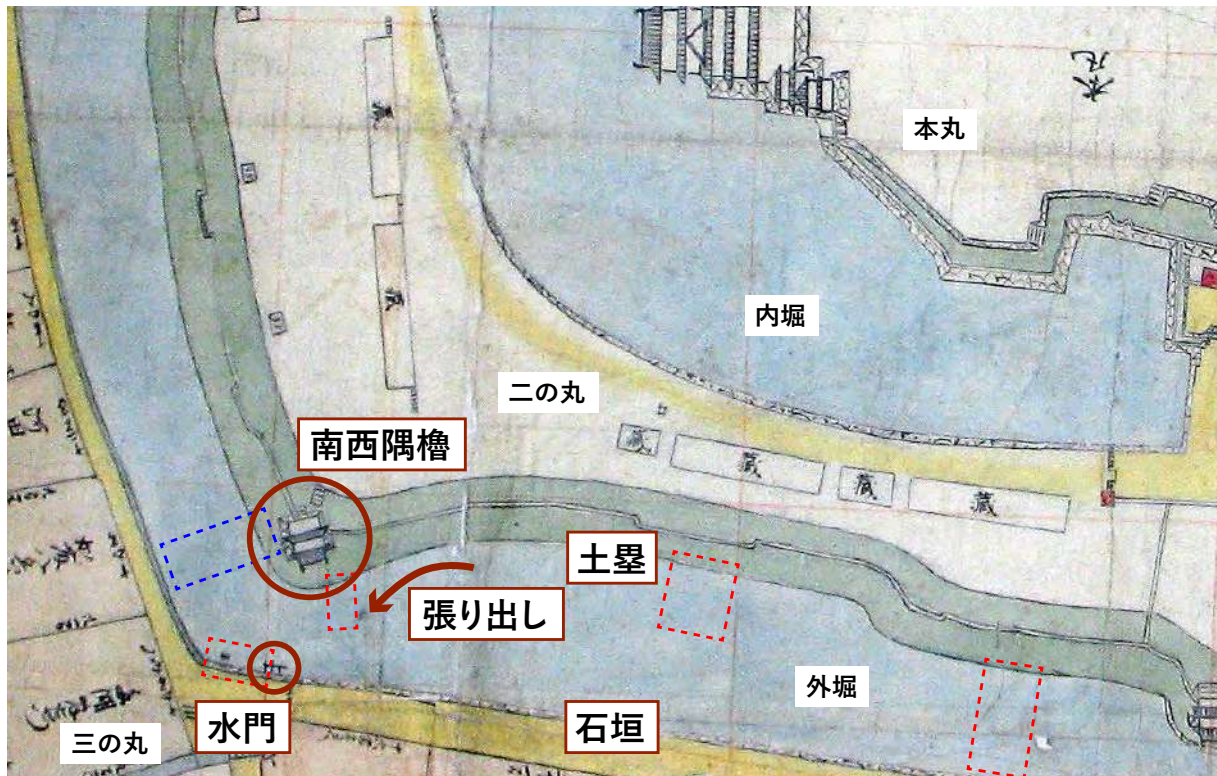


図2 享保十三年秋改松本城下絵図 より作成

①M拡張トレンチ

M拡張トレンチでは昨年度の調査区を拡張する形で発掘調査を行いました。昨年度確認できなかった土^ど坡面を探すとともに堀底の形状を再調査しました（写真7）。

現在二の丸側に用いられている石垣ですが、この石垣は昭和40年代につくられたものです。絵図（図2）に土塁である様子が描かれています。また、調査区付近の二の丸部は旧制中学の建設など改修を受けており、拡張されています。

今年度の調査で石垣から約5m北に木杭列を確認しました（写真8）。現在の内堀も埋め立てられているため、二の丸は想像以上に狭く外堀は二の丸側に湾曲した平面形状を持っていたことがわかります。木杭列上面の標高は約586.5mで、どのトレンチでもおおよそ一致します。地表下1.2m程度まで堀の埋め立て土、そこから堀堆積層があり、地表下1.7m程度を最深とする堀底を確認しました。



写真7 Mトレンチ 上空より撮影（上が北）



写真8 Mトレンチ 木杭列

②Nトレンチ

絵図で二の丸南西部の角が南に大きく張り出して描かれており（図2）、現在の地形と異なることから、この張り出した位置を捉えるために調査をおこないました。

調査区北側の^{かくらん}攪乱下部から造成整地層、南側地表下0.8 m程度で堀堆積物、地表下1 m程度で堀底を確認しました。調査区北側では二の丸を造成した痕跡、南側では堀の痕跡を把握しました。この間の中央部分から杭が横たえられた形で出土しました。割材であること、両端がとがっていること、大きさ、長さから木杭列として使われていたものではないかと推測しています。上部攪乱を受けた際に抜かれてしまいましたが、およその位置は変わっていないことを土層から確認しております。この位置が木杭列のあったラインであり、南西隅^{やぐら}櫓を設けていた二の丸がこの位置まで張り出していたことが確認できました（図3）。

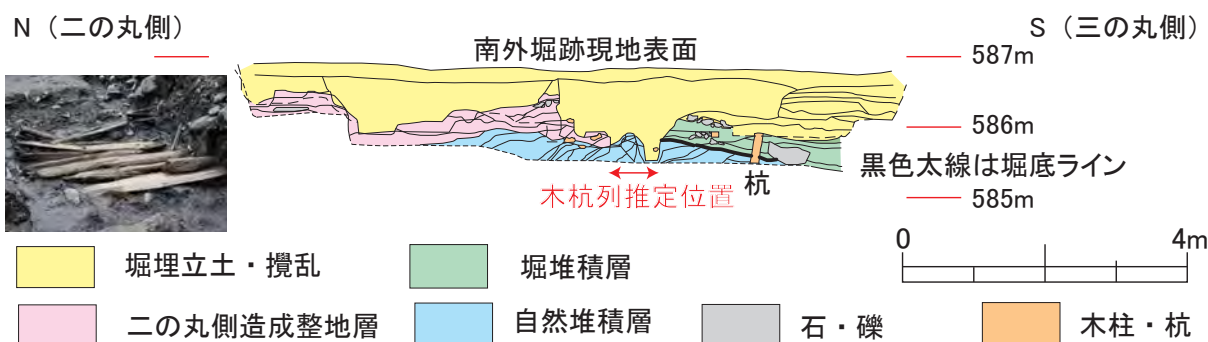


図3 Nトレンチ 断面図

③Oトレンチ

過去の調査や絵図から三の丸側には南外堀は石垣、西外堀は土坡であったことがわかっています（図2）。外堀三の丸側の南西角で南外堀と西外堀の境を探す調査をおこないました。

石垣が地表下0.3 m程度から出土しました（写真9）。1段のみ石垣が出土しましたが、本来はもう1段、あるいは2段程度高かったと考えられます。想定より西まで石垣が伸びており現在の道路下まで続いていることを確認しました。石垣と土坡が交錯する部分、南外堀と西外堀の境を確認することはできませんでした。

また、調査区の東側から白色粘土が石垣を一部覆うように出土しました（写真10）。絵図ではこの付近に水門が確認でき（図2）、過去の調査では外堀から総堀へとつながる水路遺構が出土していることから、粘土は水門にかかわる遺構であると考えています。



写真9 Oトレンチ 石垣



写真10 Oトレンチ 白色粘土

④ P トレンチ

昨年度に引き続き南外堀で横断面を捉える調査をおこないました。昨年度の成果が標準的なものであるか精査すべく南外堀で2度目の横断調査を実施しました。

三の丸側は石垣が想定される位置まで調査ができなかったため確認できませんでしたが、堀の立ち上がりを確認しました。平成9年度に調査した近接するAトレンチで石垣を確認しており、立ち上がりの先に石垣が想定されます。二の丸側では木杭列が出土し、木杭列上面の標高は約586.5mで、どのトレンチでもおおよそ一致します。木杭列の頭を水面と仮定すると、水深は約2mとなります。断面形状は、地表下1.8m程度まで堀の埋め立て土、そこから堀堆積層があり、地表下2.6m程度を最深とする堀底を確認しました。堀底の形状はおおよそ平らな底を持つ箱堀であり、昨年度のような高まりは見られませんでした（図4）。

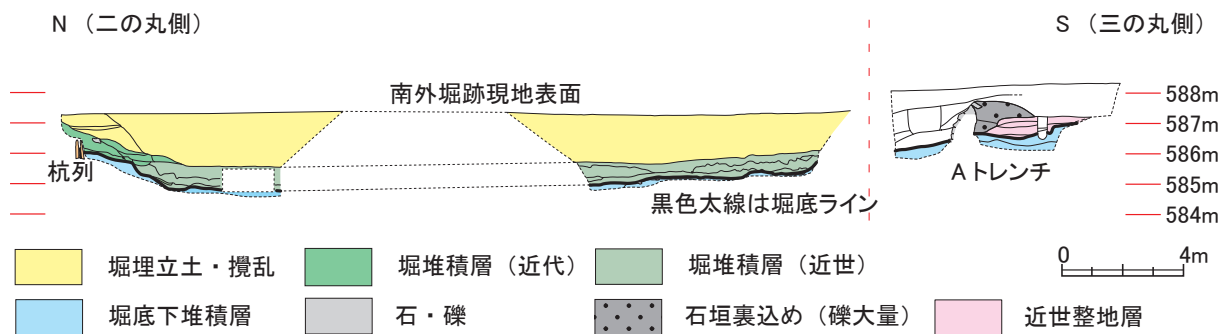


図4 南外堀 P トレンチ 断面図

⑤ 8 トレンチ

西外堀では初めて二の丸から三の丸を通しての横断調査をおこないました（写真11）。

西外堀では二の丸側、三の丸側ともに土坡で、木杭列があることがわかっています。二の丸側は現地表下1mのあたりから木杭列が出土しました（写真12）。木杭列上面の標高は約586.5mです。木杭列の頭を水面と仮定すると、水深は約2mとなります。三の丸側では木杭列や堀の立ち上がりは確認できませんでした。断面形状は、地表下1.4m程度まで堀の埋め立て土、そこから堀堆積層があり、地表下2.4m程度を最深とする堀底を確認しました。堀底の形状はおおよそ平らな底を持つ箱堀でした（図5）。

また、調査区東側には南西隅^{れき}櫓が存在していたことが絵図からわかっています（図2）。南西隅櫓の石垣のものと考えられる大量の礫や築石が出土しました。木杭列上や堀内まで礫が広がっており、隅櫓を壊した際に投げこまれたと考えられます。また、鯨^{しゃち}を含む多くの瓦が木杭列の上やその周辺から出土しました。

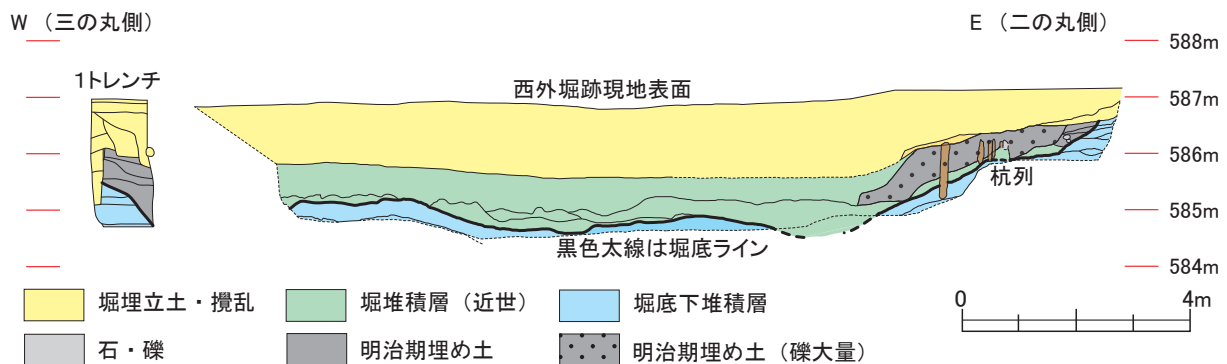


図5 8 トレンチ 断面図



写真 11 8トレンチ 全景



写真 12 8トレンチ 木杭列

遺物解説

今年度の調査では多数の遺物が出土しました。出土遺物のほとんどが瓦であることから、城としての機能が不必要となり、二の丸内の建物が破却される際に、その建物に用いられていた瓦が堀の中へ投げ込まれたものと考えています。

M拡張トレンチでは五七桐が描かれた軒丸瓦が出土しました。これは、古い瓦であると考えられ、他の軒丸瓦に比べ一回り径が大きいことが特徴です。また、鯢の胴部と思われる瓦1点も出土しています。

8トレンチでは南西隅櫓で用いられていたと考えられる大量の瓦が見つかりました。家紋がある瓦では、水野氏（寛永19年（1642）～享保10年（1725））のものが最も多く、次に戸田氏（享保11年～明治維新）のものが多くみられました（図6）。また、特徴的なものとして鯢瓦が数点見つっています。胴部、尾^{ひれ}鰭、胸^{うろこ}鰭、胸^{うろこ}鰭などを胴部に差し込むホゾの4点が出土しました（図7）。鱗の模様が異なっていることから複数個体の鯢であると考えています。南西隅櫓が解体される際に引き取られたといわれている鯢1対は現在、松本市立博物館に所蔵、展示されています。発掘された鯢瓦と博物館の鯢との関係性はわかっておらず、今後の調査研究が必要となります。



図6 軒丸瓦解説

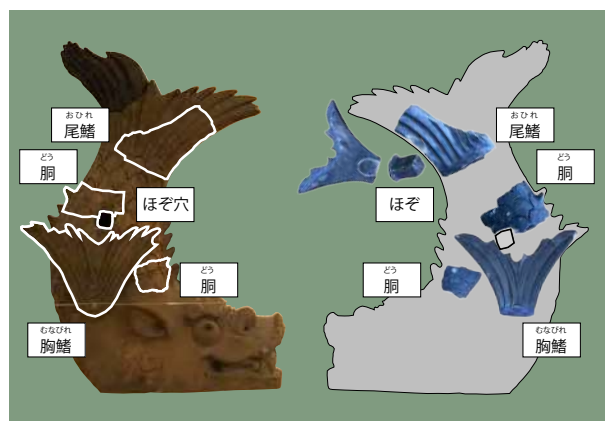


図7 鯢瓦解説

参考文献

松本市教育委員会 2020『史跡 松本城南・西外堀跡－試掘調査報告書－』

史跡弘法山古墳

第4次発掘調査

ー 3世紀のまつもとの王墓を探るー

小山 奈津実

1 調査の概要

- (1) 遺跡の所在：松本市並柳2丁目、松本市神田2丁目
- (2) 調査目的：史跡弘法山古墳再整備事業
- (3) 調査期間：令和4年（2022）6月7日～継続中
- (4) 調査面積：約 84 m²



2 遺跡の概要

弘法山古墳は松本市東部にある中山丘陵の北端に立地する全長約 66 m の古墳で、3 世紀末の築造と考えられています。丘陵の先端部に古墳があることは以前から知られていましたが、明治以降に畑地になっていたこと、第二次世界大戦の末期に高射機関銃が設置されていたことなどから、昭和 49 年（1974）に発掘調査が実施されるまで、大半が破壊されてしまった古墳であると認識されていました。昭和 49 年の発掘調査は学校の運動場建設に先立って実施され、調査の結果、弘法山古墳は東日本最古級の前方後方墳であることが分かりました。その後、昭和 51 年に国史跡に指定され、昭和 57 年には史跡公園として整備が行われ、現在は桜の名所としても親しまれています。



古墳の位置

3 昭和 49 年の調査成果

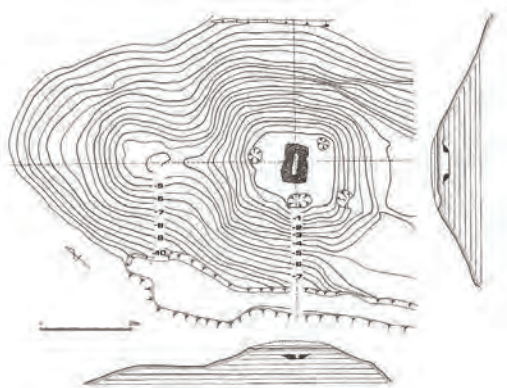
(1) 墳丘

【墳 形】前方後方墳

【墳 丘 長】約 66 m

【外表施設】石列を確認（^{ふきいし}葺石となるかは不明）
^{はにわ}埴輪は未確認

【築造年代】3 世紀末



弘法山古墳 墳丘実測図

(2) 埋葬施設

埋葬施設は長さ 5.5 m、幅 1.32 m、深さ 0.93 m の竪穴式石室状の^{れきかく}礫槨で、後方部の中央に主軸とほぼ直交するように位置しています。礫槨を構築する石は河原石が用いられており、これらは松本平に集まる複数の河川から運搬されたと考えられます。礫槨内は黒土を入れて締め固めており、天井石は確認されていません。



昭和 49 年の調査で確認した
 竪穴式石室状の礫槨

(3) 副葬品

【銅 鏡】^{じょうほうさくけいうきぼりしきじゅうたいきょう}上方作系浮彫式獣帯鏡 1 面

【装身具】ガラス小玉（首飾り・手首飾り）738 点

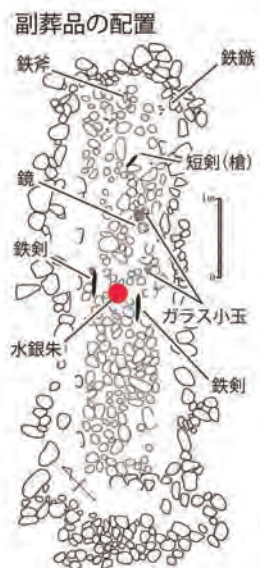
【武 器】鉄剣・鉄槍 3 点、^{どうぞく}銅鏃 1 点、^{てつぞく}鉄鏃 24 点

【工 具】^{てつぶ}鉄斧 1 点、
^{やりがんな}鉋（木の表面を削って平らに仕上げるための工具）1 点



礫槨から出土した銅鏡

面径は 11.65 cm で、銘文に「上方作竟自有
 □青□左白帟居右」とあり、青竜と白虎の 2
 対が薄肉彫りで表現されています。銘文から、
 中国の皇帝直属の工房で製作され、日本に伝
 来した、舶載鏡であることが分かりました。



副葬品の配置

(4) 出土土器

礫槨の直上から、壺 10 点、高杯^{きだい} 10 点、器台 2 点、
 甕^{てあぶり} 2 点、手焙形土器^{さいし} 1 点などの土器がまとまっ
 て出土しました。祭祀などの目的で用いられた可
 能性が考えられます。これらの土器は東海地方の
 特徴を有することから、被葬者は東海地方と深い
 関わりがあった人物であったと推定されます。



弘法山古墳から出土した土器

いであわにし
● 出川西遺跡 ●

出川西遺跡は、弘法山古墳から西に1,200 mの南松本駅北側一帯に広がる遺跡です。平成25年（2013）に実施した発掘調査では、古墳時代前期の竪穴住居の壁際から、土器11点が1～2列に並べ置かれた状態で出土しました。



出川西遺跡から出土した土器

これらの土器には、松本の特徴を持つものと、東海地方の特徴を持つものの2種類がみられました。このことから、出川西遺跡一帯は、弘法山古墳の被葬者が拠点とした集落のひとつであった可能性が考えられます。

4 史跡弘法山古墳再整備事業

(1) 弘法山古墳が抱えている問題

- ア 昭和49年の調査は埋葬施設を中心とした範囲であったことから、墳丘の正確な形状や規模、葺石などの外表施設や周辺遺構などの解明が不十分である。
- イ 弘法山古墳と周辺にある古墳群や集落との関連の解明が不十分である。
- ウ 昭和57年の整備以降、本格的な整備を実施していないことから、整備や保存活用を図る必要がある。



発掘調査などによって弘法山古墳の学術的な価値を明らかにした上で、整備や保存活用を図り、弘法山古墳の魅力を伝えたい。

(2) 整備に向けて実施している内容

- ア 赤色立体地図の作成：地形測量による弘法山古墳及び周辺の古墳分布の確認
- イ 弘法山古墳の発掘調査：古墳の形状や規模などの確認
- ウ 関連古墳群の調査：弘法山古墳に後続する周辺古墳群の調査（東海大学と連携）



中山北尾根3号古墳の発掘調査



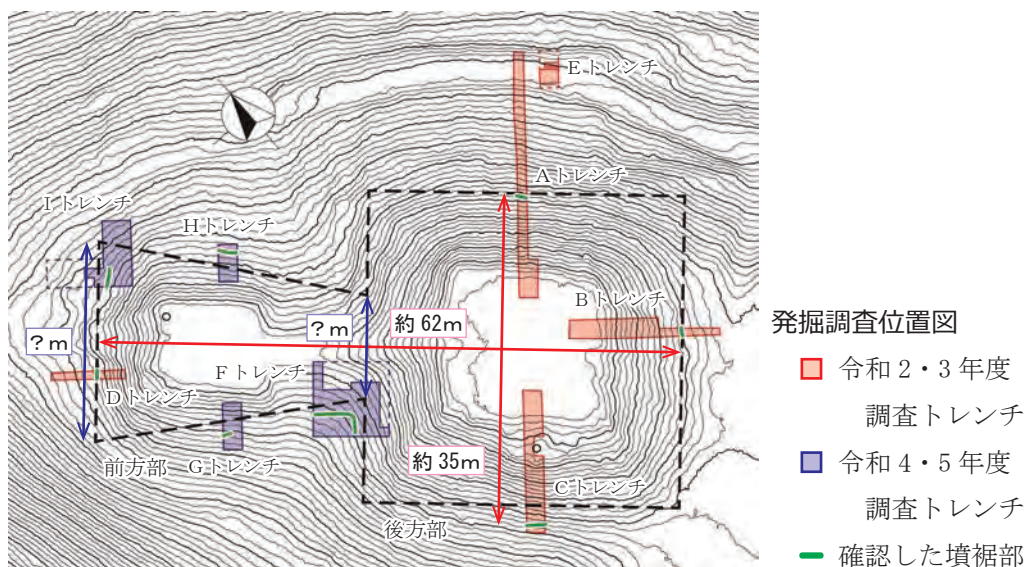
調査の詳細は
事例報告③

中山北尾根3号古墳の発掘調査

5 令和2～4年度の調査成果

(1) 調査箇所

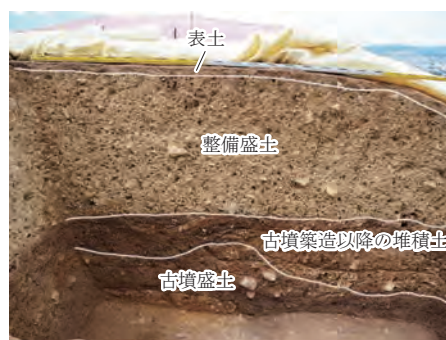
墳丘の形状、規模や外表施設の有無の確認、昭和49年調査トレンチ状況の確認のために、前方部及び後方部にトレンチ（古墳の性質を判断するために掘る溝）を設定し、調査を実施しました。



(2) 盛土

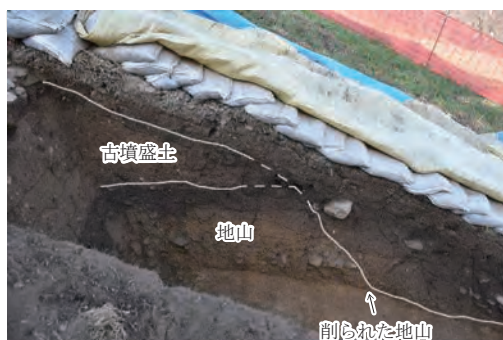
古墳の盛土、古墳の築造後に堆積した土、史跡公園として整備をした際に古墳を保護するために盛った土などを確認しました。古墳の盛土は固く締まっており、丁寧に突き固めて古墳が造られたことが分かりました。

A トレンチ墳頂部



(3) 墳裾（古墳の端の部分）

地山（土地の基盤となる土層）を斜めに削って整形してから土を盛る方法、地山を斜めに削らずに土を盛る方法の2種類の工法を確認しました。



A トレンチ墳裾部



D トレンチ墳裾部

(4) 墳丘規模

A～Dトレンチで確認した墳裾部から、古墳の全長及び後方部の幅を推定することができました。

古墳の全長：約 62 m（B・Dトレンチの墳裾部から推定）

後方部の幅：約 35 m（A・Cトレンチの墳裾部から推定）

(5) 集石

Bトレンチの墳裾部の外側にあたる位置から、10～20 cm程度の石がまとまって確認されました。この石は角礫^{かくれき}だけでなく円礫^{えんれき}も含まれていることから、河川から持ち込まれた可能性が考えられます。出土位置から、崩落した葦石の可能性もありますが、詳細は不明です。



B トレンチで確認した石

6 今年度の調査成果

(1) 調査箇所

令和4年度に引き続き、前方部の南西・北東・北、くびれ部（前方部と後方部が結合する部分）の南西の4か所にトレンチを設定し、調査を実施しています。調査は、墳丘の形状や規模、外表施設の有無の確認を目的としています（F～Iトレンチ／位置は前頁参照）。

(2) 葦石

Fトレンチでは、古墳の斜面に敷いた葦石が確認されました。葦石は、5～25 cm程度の角礫や円礫が組み合うように置かれていました。昭和49年の調査では葦石の有無が不明でしたが、今回の調査により、弘法山古墳には葦石があることが判明しました。



F トレンチで確認した葦石

(3) 墳裾

F トレンチの墳裾部では、斜めに削って整形した古墳盛土が確認され、前面には裏込め土（葺石の安定を高めるために葺石の背面に入れた土）がみられました。また、墳裾部の付近では 20 ～ 30 cm 程度の石が確認されました。この石は、基底石という、葺石の一番下に据えられた大形の石と推定されます。



F トレンチ墳裾部

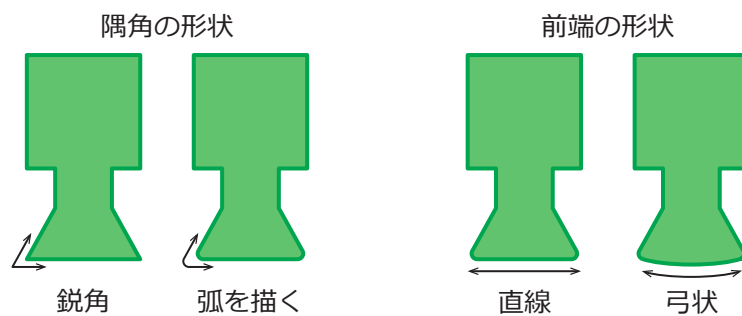
(4) 前方部の形状

古墳の前方部の形状は、台形の他に、撥形（三味線の撥のように前方部が開く形）、柄鏡形（鏡の柄のように前方部がまっすぐな長方形）がみられます。昭和 49 年の調査では前方部の形状が分かっていませんでしたが、F・G トレンチで確認した墳裾部から、撥形になることが分かりました。撥形は古い時期に造られた古墳に多くみられる特徴です。



F トレンチで確認した墳裾部

前方部は他にも、隅角や前端の形状に特徴がみられます。弘法山古墳の前方部の隅角や前端は、どのような形状をしているのか判明していないことから、I トレンチの調査で確認を目指しています。



(5) 集石

F トレンチの墳裾部の外側では、5 ～ 30 cm 程度の石が多量に確認されました。これは、古墳の外側に置かれた敷石^{しきいし}の可能性が考えられることから、引き続き調査を進めて検討をしていきます。

F トレンチの墳裾部の
外側で確認した石



7 まとめ

- (1) F トレンチでは、昭和 49 年の調査で有無が判明していなかった葺石を確認することができました。
- (2) 古墳の形状や規模を決定するための墳裾部を各トレンチで確認し、弘法山古墳の基本的なデータを得ることができました。
- (3) 前方部の形状は撥形になることが分かりました。撥形は古い時期に造られた古墳に多くみられる特徴であることから、弘法山古墳は、遺物だけでなく、墳丘の形状からも古い時期の古墳であるということが分かりました。
- (4) F トレンチの墳裾部の外側では、敷石の可能性のある石が確認されています。引き続き調査を実施し、敷石の有無や範囲について検討を進めます。

来年度以降は、発掘調査報告書作成に向けて、令和 2 ～ 5 年度の発掘調査成果のまとめ、現在の学術的知見による昭和 49 年発掘調査成果の再整理を進めていきます。



遺物の整理作業も実施しています



遺物の洗浄



遺物の台帳作成

中山北尾根 3 号古墳

発掘調査

— 87 年前の発掘者との遭遇 —

東海大学 文明研究所
白川 美冬



1 調査の概要

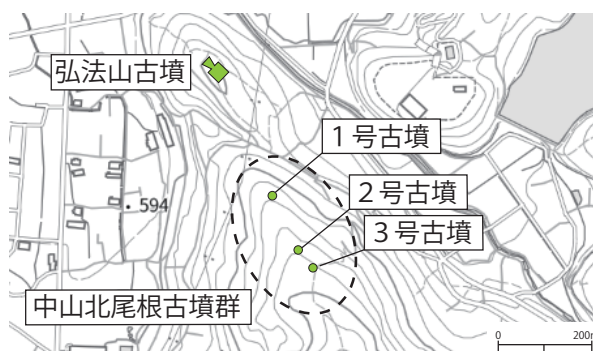
- (1) 遺跡の所在：松本市中山
- (2) 調査目的：史跡弘法山古墳再整備事業に伴う周辺古墳群の調査
- (3) 調査期間：令和 5 年（2023）9 月 1 日～9 月 20 日
- (4) 調査面積：53 m²
- (5) 主な遺構：墳裾（古墳の端）、周溝（古墳の周りを巡る溝）、葺石（墳丘の斜面に敷いた石）
- (6) 主な遺物：土師器、須恵器



2 遺跡の概要

(1) 謎の中山北尾根古墳群

中山北尾根 3 号古墳は弘法山古墳から南にのびる丘陵上に点在する中山北尾根古墳群の一つです。中山霊園へと繋がるハイキングコースの途中に土の高まりが存在することは以前から知られていましたが、古墳の時期や形、弘法山古墳との関係は謎に包まれていました。

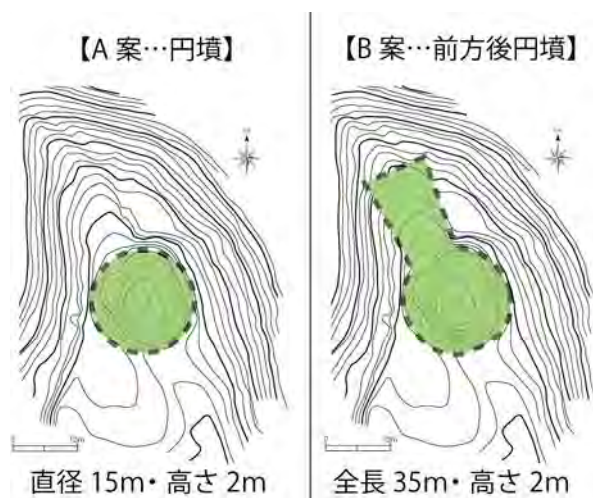


中山北尾根古墳群と弘法山古墳の場所

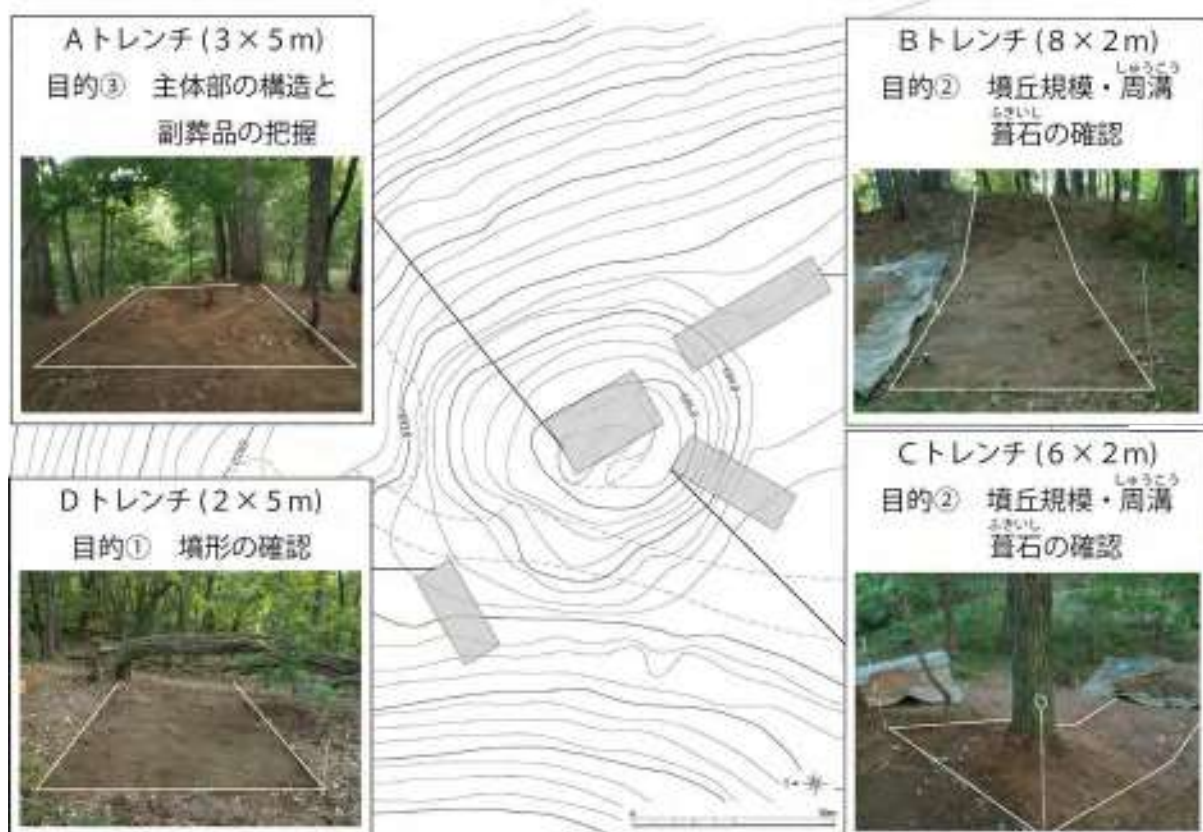
(2) 測量調査と地中レーダー探査

まず古墳の形を探るため、東海大学は令和 4 年（2022）春に測量調査を行いました。その結果、直径 15 m・高さ 2 m 前後の円墳（A 案）、あるいは北西方向に前方部をもつ 35 m 前後の前方後円墳（B 案）の可能性が浮かびあがりました。

また同じ年の冬には古墳の内側の構造を調べるため、地中レーダー探査機を使用した調査も行いました。しかし残念なことに反応が悪く、内部がどうなっているのかわかりませんでした。



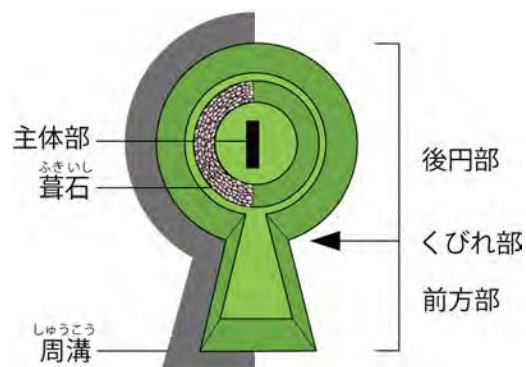
測量からわかったこと



本年度の調査範囲

(3) 発掘調査の目的

そこで中山北尾根3号古墳の謎に迫るべく、東海大学が令和5年の夏に発掘調査を担当させていただきました。①墳形の確認(Dトレンチ)、②墳丘規模・周溝・葺石の確認(B・Cトレンチ)、③主体部の構造と副葬品の把握(Aトレンチ)が主な目的です。今回の調査では、A～Dトレンチの4ヶ所を掘り進めていきました。



古墳の部位

3 調査成果

(1) Dトレンチ(4×2m、目的①)

仮に前方後円墳の場合、後円部と前方部の間にくびれが確認できます。この「くびれ部」の有無を判断するために、Dトレンチを設定しました。

しかし戦後の食糧難の時期に畑が作られた影響で、土が混ざられていて、くびれ部があったのかはわかりませんでした。



Dトレンチの様子

(2) Bトレンチ (8×2m、目的②)

Bトレンチでは傾斜が変わる部分に墳裾(古墳の端)があり、墳丘の上側には盛土(古墳に盛られた土)と葺石(墳丘斜面に敷いた石)と思われる角礫(角ばった石)が集中して発見されました。

通常、古墳に葺石が敷かれる場合、時間の経過と共に崩れ、墳裾に溜まっていきます。しかしBトレンチの標高が低い場所からは角礫が発見されませんでした。

不思議に思いながら調査を進めていくと、墳丘の下側は平らな地山(天然の地盤)が広がることがわかりました。

こうした成果から、墳丘の下側でも畑作が行われ、開拓者によって葺石が外され、土が平らに掘削されたのだと推測できます。



Bトレンチの様子

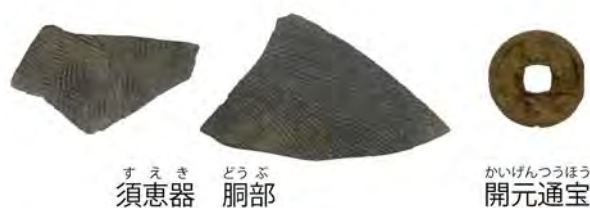
(3) Cトレンチ (6×2m、目的②)

一方、CトレンチではBトレンチと反対の現象が確認されました。周溝(古墳の周りを巡る溝)が発見され、墳丘斜面から崩れた葺石が溜まっていたのです。

どうやらCトレンチでも畑作は行われていたようですが、奇跡的に周溝や墳裾の深さまでは、掘られずに済んだようです。

また周溝の一部を掘り進めたところ、墳裾が確認されBトレンチの墳裾と繋がることもわかりました。そこで図面上で繋ぎ合わせてみると予想よりも4m大きい直径19mの円墳であることが判明しました。

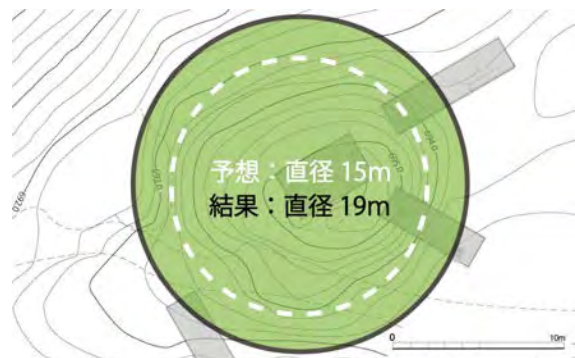
そして墳丘の上側からは、なぜか古墳時代の須恵器と平安時代の開元通宝が出土しています。



Cトレンチ出土遺物



Cトレンチの様子



墳丘の規模

(4) Aトレンチ (5×3m、目的③)

Aトレンチは調査前から中心部分がくぼんでおり、すでに掘られている可能性がありました。仮に土がかき混ぜられている場合、思わぬ場所から副葬品が出土することがあります。そこでAトレンチでは、全ての土をフルイにかけ、慎重に掘り進めました。

【謎のくぼみの正体】

調査を進めていくと、西側に直線的に掘られた状態が確認されること(A1)、②集中して土器片が出る場所があること(A2)、③トレンチの中心に南北方向に延びるくぼみがあることがわかりました。

①の結果から、盗掘者が適当に掘ったとは考えにくく、むしろ発掘調査の専門知識を持った人間があらかじめ区画を設定し、発掘調査を行った可能性が高まりました。

じつは中山北尾根古墳群は後藤^{しゅいち}守一という有名な古墳の研究者が、郷土史研究を担う教員に向けた考古学講座の一環として発掘したことが知られていました。しかし、昭和12年(1937)に発掘されたこともあり、どの古墳が発掘されたのかまでは、記録が残っていませんでした。

私たちは中山北尾根3号古墳の発掘調査によって87年前の発掘者と遭遇したのです。

【墓を見せるための工夫】

②の場所から出土した土器片は状態が良く、いずれも4～5世紀のものであることがわかりました。しかし、あまりにも出土する場所が偏ることから、87年前の発掘調査の際に出土した土器を、この場所にまとめて埋めた可能性が出てきました。

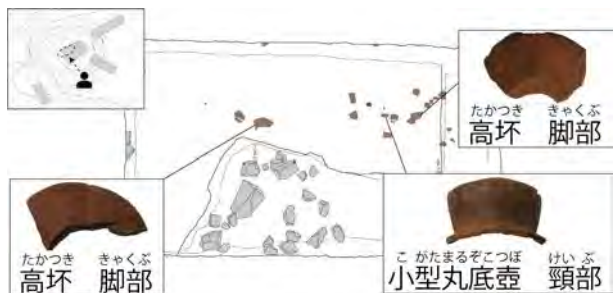
また③に目を向けてみると、長方形のくぼみの内側には有機物を多く含んだ黒色の土が確認されました。この事実から、③のくぼみは地表に露出した状態で放置され、木の葉などの有機物や砂が自然に溜まり、次第に埋まったことがわかりました。



Aトレンチの様子



① A1の直線的に掘られた箇所



② A2の土器の出土状況



③長方形のくぼみ

以上の事実関係を整理すると、つぎのような経緯が復元できます。

I 昭和 12 年に後藤守一がトレンチを設定し発掘調査を行う。

II 発掘調査終了後、墓壇（^{ぼこう} 棺が入っていた場所）の形を表現しながら埋め戻しを行う。
この際、出土した土器も A 2 にまとめて埋められる。

III 墓壇が長い年月をかけて埋まっていき、現在のようにくぼみができる。

つまり、中山北尾根 3 号古墳では発掘調査の成果を松本市民に残し、郷土史研究を活性化させるための工夫が行われていたのです。

4 調査のまとめ

今回の調査成果から中山北尾根 3 号古墳は、古墳時代前期後半（350 年以降）に造られた、直径 19 m 程度の円墳であること、葺石や周溝をもつことが分かりました。

弘法山古墳が築造されてから 100 年ほど後の時代に造られたため、直接的な関係はわかりませんでした。後藤守一が昭和 12 年に発掘調査を行ったこともわかりました。そしてその後、第二次世界大戦による食糧難の時代を迎え、古墳の一部は畑作地として開墾され、現在に残っています。

皆さんもハイキングに訪れた際には、東屋で休憩しながら、古墳時代の人々に思いを馳^はせてみてはいかがでしょうか。



冬の中山北尾根 3 号古墳



調査区全景（北から）

3 調査成果

(1) 中世の火葬施設跡と土葬墓

本年度は、中世の火葬施設跡を 13 基、中世以降の土坑（墓坑を含む）を 215 基検出しました。

火葬施設跡は平面形が隅丸長方形や円形をしていて、隅丸長方形のものは掘り込みが浅く、円形のもの掘り込みが深い傾向がありました。そして遺構配置をみると、遺跡範囲の東側（昨年度調査区側）を中心に、現真光寺お堂の北側くらいまで点在することが確認できました。遺物については、穴の底付近から炭化物や焼土に混じって多量の焼骨片が出土しています。また、古瀬戸の仏華瓶^{ぶっかびん}などの陶器片や、焼けた銭貨が出土したものもありました。これらの出土遺物から火葬施設跡の時期は15世紀頃と推測されます。



火葬施設跡 (SK298) から出土した仏華瓶



土葬墓 (SK314) から出土した歯

また、昨年度調査区に隣接する東側の地区では規格性のある円形の土坑を6基検出しました。いずれも直径約80cmの円形で、ほぼ垂直に50cm程掘りこんでいます。このうち5基の土坑の底から焼けていない人の歯や顎骨片が出土したため、土葬墓と推定しています。出土骨については、茂原信生京都大学名誉教授のご教示により、形成中の永久歯が含まれ、6歳以下の子どもである可能性が高いことがわかりました。同様の土葬墓は昨年度の調査でも確認されており、出土遺物がほとんどなく時期限定は難しいものの、永楽通宝を伴う例があることから中世後半と推定されます。遺構配置をみると、土坑同士が一定の距離で重ならずにつくられており、現真光寺東側の限られた範囲のみに認められます。

遺構の性格としては、歯や頭骨のみが埋納された墓坑である可能性も考えられますが、6歳未満であれば全身の埋葬も可能な大きさの穴であり、発掘調査の類似例などをあたり、その性格については慎重に検討していく必要があります。

(2) 居住に関わる遺構

遺跡範囲の西側では、土葬墓以外の土坑や溝跡が多くみつかりました。火葬施設跡や土葬墓が集中した遺跡範囲の東側に比べて、内耳鍋や陶磁器片（近世や近代以降含む）、鉄製品、石製品など、生活に関わるような遺物が出土する遺構が多々あることから、遺跡の西側には居住に関わる空間が広がっていたと想定しています。

直径約5m、深さ約2mを測る隅丸方形の土坑（SK475）からは、礫^{れき}に混じって内耳鍋や用途不明の石製品などが出土しました。出土した内耳鍋の特徴などから、16世紀頃の土坑であると考えられます。また、SK475の近くには、大きさや形の差はあるものの、同質の埋土（黒色砂質土）で、同じような内耳鍋や鉄製品、骨片などが出土する土坑（SK500）もみつかりました。SK500の底面には礫が円形に配置されており、水を溜めた井戸跡ではないかと想像しています。これらの土坑は、本来の機能を終えた大きな穴へ生活道具を廃棄したものだと考えられ、居住に関わる痕跡であると推測しています。

また、同調査区では、後世の攪乱^{かくらん}により積極的に掘立柱建物跡としては認定できなかったものの、黒色砂質土を埋土とする小規模な土坑もいくつか検出しました。こうしたことから、遺跡範囲の西側には16世紀頃の居住に関わる空間が広がっていたことが想像できます。



土坑 (SK475) から出土した内耳鍋

(3) 並行する石列と溝跡



石列と溝跡(SD30)の検出状況(南西から)

現真光寺お堂の北東部分で、幅約2 m、長さ約6 mの石列を確認しました。石列は、長径約30～50cm程の扁平^{へんぺい}礫・垂円礫が直線的に並び、その間に5～20cm前後の礫が多量に充填されていました。時期を特定できる出土遺物はないものの、中世土坑の埋土である黒色砂質土層の直上

に形成されていることから、石列は中世以降の築造物であると推測しています。なお、石列直下の黒色砂質土層には灰色シルトがブロック状に混じり、さらに部分的にわずかに硬い面があることから、人為的に平らに整地したのちに石を配置したと考えています。

また、石列の調査を進める過程で、石列に並行するように幅約2 mの溝跡(SD30)がみつかりました。溝跡は現真光寺お堂から東方向に約8 m延びたところでL字状に北方向へ曲がり、本年度調査区の北端まで続いていました。断面系は逆台形を呈し、深さは約0.6 mです。

石列は、溝跡(SD30)が北に方向を変える箇所までは確認できましたが、そこから調査区北端までの区間は部分的に礫が残るものの、現耕作土造成による削平のためか前述のような構造は認められませんでした。しかし、石列に使用されていた長径30～50cm程の礫が溝跡(SD30)の底面に散見されることから、本来は石列も溝跡に並行して延びていた可能性があります。

調査範囲の東側には土葬墓群、西側には居住に関わる遺構が広がっています。そして、溝跡(SD30)と石列はその居住空間を囲う構築物とも考えられますが、遺構の詳細な時期認定と類例調査を進めたうえで解明していく必要があります。

4 調査のまとめと今後の課題

本年度までの調査により、遺跡範囲の東側からは古墳時代終末期～奈良時代初頭の古墳や、中世土葬墓など埋葬に関わる遺構が集中してみつかり、西側からは生活道具を捨てた土坑などの中世以降の居住に関わる遺構がみつかりました。来年度調査を予定している遺跡の北西側の様相も含めて、各遺構の時期認定を慎重に行い、遺跡の実態を解明していきたいと考えています。

山形村・洞遺跡

第4次発掘調査

一県内最古級とみられる縄文早期末の玉製品が出土一

山形村教育委員会
和田 和哉

1 調査の概要

- (1) 遺跡の所在：山形村上大池
- (2) 調査目的：山形村道1級4号線歩道設置工事
- (3) 調査期間：令和5年（2023）10月16日～11月30日
- (4) 調査面積：260 m²
- (5) 主な遺構：竪穴建物跡、土坑、ピット
- (6) 主な遺物：縄文時代早期末の土器や石器・管玉

2 遺跡の概要

山形村の南端部、朝日村境に近い山麓沿いに立地し、南北200m、東西250mの範囲に広がる遺跡です。遺跡の西側には湧き水を水源とする小川が流れており、人々はこの水を求めて生活の場を選んだと考えられます。

これまでに小規模な調査も含め3回の発掘調査が行われていますが、昭和45年（1970）に行われた第1次調査では、縄文時代中期の遺構・遺物が主に発見されており、この時期の遺跡であると認識されていました。しかし今回の第4次調査では、さらに古い時期の遺跡でもあることが分かりました。



遺跡の位置

3 調査成果

(1) 7000 年前、縄文時代早期末[※]の集落跡を発見

竪穴建物跡 6 軒や大小 100 余の穴が検出され、土器片、矢尻^{やじり}やナイフ等の石器が出土しました。これらの遺構は、見つかった土器の特徴から縄文時代早期末[※]のものだと考え



調査区全景（東から撮影）



竪穴建物跡

られます。この時期の遺跡が発見されたのは山形村では初めてのことであり、村史の空白を埋める資料になりました。また周辺地域を見ても縄文時代早期末の遺跡を調査した事例は少なく、松本市洞の桜田遺跡、塩尻市片丘の堂ノ前遺跡など、数遺跡に限られます。松本平全体の歴史を考えるうえでも重要な発見と評価しても過大ではないと思われます。

見つかった竪穴建物跡は5メートル前後の径をもちますが、平面プランは円形や楕円形^{だえん}などの定型的なものは少ない状況でした。建物内部の中央付近には顕著に焼けた地床炉を有していましたが、寝食を行った床面には顕著な硬化を認めませんでした。また柱穴も規則的に並ばない状況で検出されており、どの様に屋根を支えていたか推測することは困難です。

そして集落全体の構造ですが、幅の狭い小面積の調査であったため把握することはできません。しかし限られた範囲の中で数多くの発見があったことから、細々という印象ではなく、それなりの広がりをもって存在していたと推測されます。耕作者のお話をお聞きますと、100メートル程度の広がりがありそうです。

(2) 管玉 2点を発見！

管状になっている装飾品で、紐を通してペンダントやブレスレットとして装着していたと考えられます。2点が密着して長軸方向を揃えた状況で見つっていますが、竪穴建物の中と推測される場所（削平が進んでおり床面施設しか検出できなかったため）から出土しています。こうした装身具は、墓穴に埋められた故人が装着していた状態で見つかる事例が比較的多いものですが、竪穴建物の中に置いてあったと推測される状況で見つかることは珍しいと思われます。

また材質は滑石^{かつせき}ですが、この石は大北地域など限られた場所ではしか拾えません。採取地近くの集落で加工され、遠路はるばる持ち込まれたと推測されます。こちらも縄文時代早期末[※]の所産と考えられますが、飯島町カゴ田遺跡出土例に並ぶ、県内最古級の玉製品（磨くと光沢をもつ石材で作った装飾品）と評価されます。



左上：管玉 右上：管玉出土状況 下：管玉が出土した場所（矢印箇所）

※従来、縄文時代早期末から前期初頭までと捉えられていましたが、最新の研究成果では前期初頭とする説が有力です。